

”昔のある少年の話”

少年は当時、二本の白線の入った学生帽と**色のユニホーム憧れ、いわゆる進学校を志望。彼の母親も、さる者。「うちの中学校ではこれまで多くて1人しか合格してないのに、お宅のお子さんが受けたいと言うと、今年は2人となっちゃうんで、どうしましょう？なんとか志望校を変え頂くなり、私立を併願して頂かないと、・・・」と言う担任の先生（実は母親の同級生だった！）の親切なお言葉を無視し、「ただ本人がどうしても行きたいと言いますので」と、単願を申告。本人はただただ「努力は天才に勝る」との言葉だけを信じて、そのわりに日記には「もう10時。寝るべし。」と、当時人気の”ケムパス”のイラストと共に書き留めて、床に入る。

そう言えば、あの「となりのトトロ」並の田園風景の、塾はおろか、書道教室もそろばん教室もなにもない片田舎に住む少年にとって頼れるのは、学校の教科書と先生、そして友達。そうなったら、恥ずかしい気持ちなんか捨て、級友達に詫びながら、授業中は分かるまでとことん質問をした。それに耐えかねた担任の先生が、母親を呼び出し注意したのが災い。「うちの息子の質問に答えられない先生は替えて下さい！」と、食って掛かったらしい。

ある時、理科でフレミングの右手の法則と左手の法則の違いが分からず、本人は必死に質問して2時間の理科の授業を潰してしまった。「ごめん、ごめん。」と、みんなにしきりに頭を下げた、と言う（結局、その日図書館で調べ、電流→力の時が左手の法則、力→電流の時が右手の法則と分かった）。

その理科は、彼にとって一番大好きな授業だった。と言うのは、理科は今と同じように（と思いますが）教室自体が班ごとの、水道やガスバーナーがある実験机になっていた。これは、彼にとって好都合だった。先生に隠れて好きな実験ができた。それで、彼は用具係をかって出た体育の授業の後、用具室からスタート用のピストルの火薬をすくめ、古くなった詰め入り学生服のカラー（白色のプラスチック）を切り刻んで集め、満を持した。待ちに待った理科の実験中、アルミのえんぴつのキャップで作ったロケットをガスバーナーで点火。見事にロケットが発射、石膏ボードの天井に突き刺さった。当然、彼は水一杯のバケツを両手に持って廊下に立たされるが、英雄気取りだったようだ。

はたまた勉強のできる友達をつかまえては、休み時間によく教えて貰っていた。「ありがとうっけね！○○○君」と、彼は思い出して言った。毎日出される宿題は、時々そんな具合に休み時間にちょこちょこやって、家に持ち越さないこともあった。更に、すぐに復習できると言って、1年生からのノートをホッチキスと糊で閉じ続け、3年生の2学期には厚さ7,8cmになったノートを毎日鞆に入れて通っていた、と言う。

クラブ（今で言う部活）をやって家に帰れば、きょうだいの中で一番歳下の彼の勤めは、まきの風呂炊き。そして、共働きの両親の帰りを待って、夕食。どうなんだろうか？それでも日によっては家でも2時間くらいは勉強したんだろうか。朝早く起きて、毎日電車で

中学校に通っていた、と言う。(3日)

江戸末期に建てられた少年の家の納屋には、今でも骨董屋が喜ぶような明治時代から使われた数々の小道具と共に、昭和初期の列車(勿論、当時は蒸気機関車)の時刻表が残っていた。黄ばんだその紙には、1日にたった1往復の時間表が毛筆でしっかりと書き込まれていた、と彼は言う。勿論、彼が通っていた頃は客の少ない昼間は1時間1本、朝夕の通勤・通学時間帯にはそれでも1時間に3本はあった、と言っていた。山間の川沿いを走る鉄道ゆえ、大雨が降るとよく線路わきの崖が崩れ線路が埋まり、そこは歩いて向こうで待つ列車に乗るといふことも何回もあった、と言う。

彼の通っていた小学校は、彼が6年生になると廃校になり、片道30分程の電車通学が始まった。小学校は下の学年の子ども達を引き連れての集団電車登校。帰りも集団電車下校だったかな?中学校では毎日クラブ活動もあり、乗り遅れたら次の電車まで待ち、ほんと時々その待ち時間に宿題をやったり、ある時は電車の中で疲れて寝込んでしまい、見知らぬおばさんに起こされ、あわてて飛び降りたり・・・そんな生活だった、と言う。高校生の時は、クラブ練習疲れで寝過ごししまい、終点の駅から車掌さんに自宅に送ってもらったことが何回もあったようだ。

今と違って殆どが塾に通っていない(と言うか、塾がないんですね)当時は、クラスでの班の勉強会が盛んだった、と彼は話した。数学や英語は、先生の板書き授業のあと、机を班毎に向かい合わせして班で教え合いながら問題を解いていった。時々放課後にもクラブ活動の前に、班の仲間で集まって勉強会が自主的に行われていた。だから、みんな仲間意識も強く、今でも4年ごとに同窓会を開いては親交が続いており、今のいじめや不登校が信じられない、と彼は語ってくれた。(6日)

そんな少年も14歳で初恋をした。彼の姉と同じクラブの同級生だった。「数年後ミス*(高校名)に選ばれた。彼には誠に申し訳ないが、彼にはとても不釣り合いなかわいい子だった」と、彼の友達と言う。勿論、当時の片田舎の14歳の少年、少女の恋愛なんて、今の中学生には想像がつかないくらい(?)”うぶ”なのかもしれないね、と彼は言っていた。「塾なんてなかったけど、クラブ活動は毎日行われ、週に1回は生徒会の委員会がある。そんな学校生活で、時折手紙と言うか、交換ノートみたいなものを渡す位。あまりみんなに知られないように、休み時間はちょこっと話す程度。電話?そんなの照れくさくてしないよ。お互いの誕生日に、手作りの物や本を送り合ったり。それでも5年位続いたのかなあ。高3の12月、自分の友達と親しげに話す彼女と出くわしてしまっ、それで終わりさ。」
「でも、その時はいろんな事を知ったし、考えた。なんて言うかなあ、ホント初めて自分をとことん見つめ合った気がする。」と、彼は語り続けた。(21日)

2000年7月3日(月)、6日(木)、21日(金)付けの「ひげぐま先生のひとりごと」から